

森林・農業班 B

ラオスにおける家畜をめぐる社会関係

高井康弘 (大谷大学文学部)

キーワード： 家畜、牛・水牛、黒タイ来住民、屠殺兼鮮肉卸商

調査期間・場所： 2003年8月13日～9月13日

Social Aspects of Livestock in Laos

Yasuhiro TAKAI (Faculty of Letters, Otani University)

Keywords: livestock, cattle and water buffalo, Northern Laos

Research period and Site: 2003, August 13-September 13, Northern Laos

1. はじめに

本プロジェクトのなかで、メコン河集水域、とくにラオスにおける家畜と人間の関係、あるいは家畜をめぐる社会関係の諸相を考察の対象に、現場調査を始めている。当地における近現代の政治・経済・社会状況の変転のなかで、家畜と人間の関係がどのように変化したかを把握し、理解する作業を通じて、当地の人々の生き方あるいは社会・文化のありようの特質や問題を考察し、当地の人々あるいは我々が他の生命とどのように向きあい、共生しうるのか、といった問題を考えるヒントと得たいと考えている。

家畜のなかでは、当面、牛・水牛に焦点を当てる。牛・水牛は当地の農村間ないし農村と市街の間の経済をつなぐ主要な財のひとつであり、農家の重要な生産手段であり、動産であると同時にさまざまな文化的意味を担うシンボルであったと考える。牛・水牛の生産、流通、消費の各形態の変容過程を把握することが、当面の目標となる。それぞれの地域の諸条件のなかで、牛あるいは水牛と人々はどのように付き合い、その付き合いは人々にどのように認識されてきたのか、そうしたありようは、諸条件の変化のなかで、どのように変わってきたのか、あるいは、牛・水牛肉の食材としての位置づけや、調理法、需要・供給状況、屠殺等食肉処理のありようは、どのように変化してきたのか、等が主な調査項目となる。

2003年度は、こうしたもくろみで、ラオス北部を最初のフィールドとし、2003年8月13日から9月13日の間、資料収集調査を行なった。ルアンパバーン市周辺をメインの対象とし、ルアンパバーン県ナムパーク郡、ウドムサイ県ベーン郡、フン郡、ボンサーリー県クワー郡、ビエンチャン市内などで、比較のための短期調査を行なった。調査テーマは“Socio-economical Change and Culture on Cattle / Water buffalo in Northern Laos: Pasturage, Agriculture, Butcher Business and Fresh Meat Diet Customs” (ラオス北部における牛・水牛にかんする文化と社会経済の変化：放牧、農業、屠殺・食肉流通、および生肉食慣行) とした。ラオス側のカウンターパートは情報文化省 (Ministry of Information and Culture) 文化調査研究所 (Institute for Cultural Research) であった。

調査は、牛・水牛 (肉) 流通にかんして、1975年の社会主義体制への転換以降、とくに90年代、市場開放化の流れのなかでの諸変化に焦点を当てるものとなった。牛・水牛 (肉) の売買状況を追うことで、地域経済の動向、地域間あるいはエスニシティ間の市経済的社会的関係、人々の生活戦略や生活様式、価値観の変化の、ある側面を浮かび上がらせたいと考えた。

2. 屠殺兼鮮肉卸商

そのなかで、ひとつには、ラオスの社会経済体制の変転下、黒タイ来住民が90年代以降、個人業者として、ルアンパバーンの牛・水牛屠殺兼鮮肉卸商の多数派を占めていく過程についておおよその見取り図的理解を得た。同市には2003年8月時点で、牛・水牛屠殺兼鮮肉卸商が8業者いるが、その大半が黒タイの人々であり、市南西端の1村 (P村) の住人である。P村は、1950年代、第1次インドシナ戦争後に、当地に強制移住させら

れたベトナム出身の黒タイの人々を最初の草分けとし、その後、ラオス・ベトナム国境付近のクワー郡ソップフン村の人々など、戦禍を避けて当地に来住した黒タイの諸グループの離合集散のなかで形成された村である。P村の隣村には、フランス植民地期の1920年から25年にかけて建設された屠殺場があるが、新参者である黒タイ来住民の一部が、屠殺作業員として、ラオ人の頭に雇われて働くようになったのが、黒タイ来住民と屠殺業の関わりを発端である。その後、1975年の社会主義体制への転換、旧体制下の流通業者の亡命、屠殺場の国営化、その後の法人化などの変転を経て、90年代の市場開放化の流れのなかで、黒タイの人々の数名が屠殺業経営者として独立するようになり、現在に至っている。

また、ルアンパバーン県中心部の牛・水牛（肉）流通の現状について、おおよその見取り図的理解を得た。屠殺兼鮮肉卸商は屠殺作業員を雇い、深夜のうちに屠殺解体作業を行ない、得た鮮肉を早朝、鮮肉小売商に卸すが、屠殺作業員および小売商の大半は、屠殺兼鮮肉卸商と同じくP村の黒タイの人々であり、彼らの関係は互いに常連の長期安定的なパートナー的な色彩を帯びている。屠殺兼鮮肉卸商の多くはトラック、携帯電話をもち、郊外の村々の仲買人を回り、牛・水牛を仕入れるが、仲買人のエスニシティはさまざまであり、仲買人と屠殺兼鮮肉卸商の取引はビジネスライクで流動的な性格が強い。ラオスにおける市場経済の活性化、タイとの取引の活発化、道路整備の進展とモータリゼーションの進行といった状況のなか、牛・水牛肉の需要は増しており、仲買業、屠殺兼鮮肉卸業は、うまくやれば、儲けの大きいビジネスとなっており、参入する人々も急増しており、相互の競争は激しい。ルアンパバーンの屠殺兼鮮肉卸商の多くは、白亜の近代家屋を建て、経済的に成功しているが、ピエンチャンの同業者との競争にさらされており、今後淘汰が進むことが予想される。仲買人も過当競争の状況である。仲買人は農村集落に居住し、特定の範囲を取引圏としているが、彼らにはいくつかのタイプがある。農業の副業として農閑期の乾季のみ行なう者、農産物仲買や旅客運送業の副業として行なう者、専業で従事する者などである。前二者のばあい、特定の山地や河川沿いを歩いて農家を訪ね歩く者も少なくないが、後二者は自動車を所有しており、幹線沿いを広く行動範囲としている。仲買人は仕事柄人脈を広げ、蓄財も進むので、それを資源に地域の政治的有力者になる事例が少なくないようである。仲買人は、山地で多数の牛を放牧しているカムやモンの人々、低地河川沿いの水田稲作集落で水牛を飼育しているタイ・ルーやラオの人々を訪ね、牛・水牛を仕入れるのだが、山入りが可能な乾季には前者との取引が活発化し、雨季には後者との取引が多くなるようである。仲買人は前述のように増加しているが、牛・水牛飼育数のほうは農業の機械化、放牧可能な林野などの条件の変化のなか、減少傾向にあると思われる。

ルアンパバーンにおける牛・水牛（肉）流通の現状とその形成過程については、「ルアンパバーンの牛・水牛屠殺業と黒タイ来住民—ラオス北部の社会経済変化の一側面—」（北原淳編『東アジアの家族・地域・エスニシティ』東信堂、2004年秋刊行予定、所収）として、発表予定である。

3. 流通システム

今回は、上記のように、ひとつには、ルアンパバーンの牛・水牛屠殺兼鮮肉卸商を中心とした牛・水牛（肉）の流通状況の把握に焦点を当てたが、他方、これに関連して、次のふたつの調査を行なった。

ひとつは、ルアンパバーン県ナムパーク郡域およびウドムサイ県域の牛・水牛屠殺、流通状況に関する調査である。いまだ断片的な資料収集に留まっているが、ラオス北部各地の流通システムは、それぞれ独自の地方色のあるものであり、上記のルアンパバーン中心部の鮮肉流通のシステムが、必ずしも一般的とはいえないことがはっきりしている。ただし、いずれの地域でも、黒タイやカムなど、非仏教徒の人々が屠殺業を担う傾向ははっきりしており、注目しうる。ただし、こうした各地の流通システムは、それぞれ市場活発化のなかで、近年形成され、また移り変わりつつある途上のものなので、やや長期的な視野から比較検討したい。

4. 生産システム

ふたつめには、ルアンパバーン県のタイ・ルーおよびラーオの河川沿い低地水田稲作集落一般小農家の牛・水牛飼育、役畜利用および関連儀礼、牛・水牛売買および関連儀礼、肉調達、調理、食慣行にかんする聞き取り、観察を行ない、断片的ながら、今後調査を継続するうえで参考となる知見を得た。

飼育にかんしては、放牧が中心であることを確認した。放牧は、早朝、林野に放し、夕方、探して連れ戻す、

あるいは、牛・水牛が夕方、自分で帰ってくる形が多く、放牧中、番はしないケースが多い。鈴（マークカディン *maakkading*）を付けているばあいもあれば、付けないばあいもある。朝夕に塩を与えて、手なづけて、自ら戻ってくるよう仕向けていることが特徴的である。草を刈り、与えるなど飼料確保の重労働が伴う繋ぎ置き飼育に比べて、省力的で、近からず遠からずの牛・水牛と農家の関係である。

ただし、こうした放牧に伴うトラブルがいくつかある。最近、牛・水牛の盗難被害が増えているときく。かといって、ずっと見張ったり、家に繋ぎ置いたりといった対策は採らない。放牧中の牛・水牛が、水田の稲や他の農作物を食害するともきく。村によって、頻繁だとするとところと、あるが少ないとするとところがある。被害農家は村長に訴える。農家がちゃんと柵をめぐらせていない場合は、弁償（サイ・テーン）してもらえない。農家に落ち度がないばあいは、牛・水牛所有者は被害の弁償をしないければならなくなる。被害が日常化し、放牧禁止を取り決めた村もある。また、牛・水牛が寄生虫病で死ぬケースが目立つ。輸送手段の発達により、寄生虫病が以前より急速に広域に広がる可能性が懸念される。予防注射をするようになり、ここ4-5年沈静化したとする村が多いが、予防注射を怠り、被害が顕在化するケースもきく。半年に1回、ペート・プラチャム・バーン（村人のなかから有志で講習を受け、村常駐の獣医の代役的な役割を担う人）が寄生虫の予防注射を行なっているケースが多い。

水牛は依然、水田耕起に一般的に利用されている。水田耕起を、水牛で行なっている農家は依然多い。耕起使役は雄のほうがよいが、雄は統御するのが難しい。また、村によっては、荷籠（カースーン *khassyn*）が使われている。水牛1頭に付けて曳かせる。狭くでこぼこのある畦道などで重宝するという。1回で粉袋（30キロ）を5袋運べるという。

5. 儀礼と慣行

牛・水牛にかんする儀礼にかんしても断片的ではあるが、調査資料を得た。

たとえば、耕起使役後の水牛の魂振り儀礼（*suukhwan khwaa i*）にかんしては、いくつかの事例を観察することができた。たとえば、ウー川沿いのタイ・ルーの集落における事例では、水牛での耕起を行なった各農家の主人が、耕起終了後の早朝に、次のような魂振り儀礼を行なっていた。カントークに花・ローソク・菓子などを用意し、呼びかけの言葉を述べたあと、モチゴメご飯・おかず・菓子を水牛の額2箇所に置き、両角を綿糸で縛り、そこにスアイ（バナナ葉製の円錐形の小容器に花をつめたものを挿した後、雄の水牛のばあいはズボンと上着、雌の水牛のばあいは、巻きスカートと上着を用意し、水牛の背に置く所作をする。そして、塩をなかに入れたモチゴメのおにぎりを口のなかに押し込んで、食べさせる。さらに、竹の若葉（*yayung, maibonnooi*）を口のなかに押し込んで食べさせる。耕起使役後の水牛魂振り儀礼は、各地で行なわれており、ルーのほか、カム、黒タイ、赤タイ、白タイ、ラオの村でも、儀礼の概要の聞き取り調査を行なった。水牛にたいして呼びかける句の文言が、仏教徒のルーと非仏教徒のカムなどでは異なるなど、興味深い点がいくつかあった。

また、水牛売却後の供養儀礼（ターン・パー・カーウ）について、聞き取り調査を行なった。

牛・水牛の売却は、それらを屠殺への流通ルートに委ねることである。つまり、売却は牛・水牛を間接的に殺害する行為である。ルーの農家では、売却後、お金を寺院にお布施し、牛・水牛に功德を回向する儀礼を行なう。こうした儀礼は、牛・水牛と縁を切る儀礼でもある。儀礼を行なえば、牛・水牛は祟ることはないと言われる。約20年前、ピー・プーヤー（祖先伝来の守護霊）廃棄の際も、同様の儀礼的手続きがなされたという。

こうした水牛にかんする魂振り儀礼や供養儀礼は、人々が水牛（の魂、生命）と自ら（の魂強い・生命）の関係や異同を、どのように捉えているを考える上で、興味深いものである。前述の牛・水牛流通において、屠殺を誰が担うか、という問題も、このことと関連してくる。農業の機械化、市場経済の活発化、モータリゼーションの進行などにともなう、牛・水牛の役畜機能の縮小、食材商品化、牛・水牛（肉）の流通量、流通範囲の拡大、生産・流通・消費に関わる業者の分業化の徹底のなか、牛・水牛はたんなる「モノ」として扱われる傾向が、ラオスでも強まりつつある。しかし、従来の牛・水牛と人との関係、あるいはそれと関わる文化や自他観が、消滅したわけではなく、両者の矛盾に人々が直面する局面、あるいはそれに対処する直面は、上記の諸儀礼や屠殺従事者が非仏教徒に傾斜する現象などに見て取りうると思われる。

そのほか、肉食慣行、とくに生肉料理ラップをめぐる食文化も、本調査の主要項目のひとつであり、宴の状況の変化、食材の調理法、食をめぐる嗜好や禁忌にかんする資料も得た。今後、総合的に検討していきたい。